

津留宏『一少女の成長 小さな魂の記録の分析』再考

—発達の視点からみた青年期の自我と心理的資料としての日記—

法政大学社会学部兼任講師 山下 大厚

1 はじめに

青年心理学⁽¹⁾を専門とする津留宏（以下、津留とする）は、女子高等師範学校教授兼女子大学助教授時代に、ある少女（仮名 菊池登喜子 以下、登喜子とする）の日記を主な資料とした研究を『一少女の成長を見る教育心理学的考察』として纏め昭和25年秋に出版した。30年ほど絶版になっていたこの書を新たな出版社の勤めで、改訂新版『一少女の成長 小さな魂の記録の分析』として昭和55年に復刊している⁽²⁾。

改訂新版は、主な資料となる日記などの部分には手を加えず、本文を読み易いものに手直しし、立教大学の村瀬孝雄心理学教授が新しいあとがきを寄せている一方、旧版にあった心理学者の依田新の序文と津留と同じ女子大学・女子高等師範付属小学校主事 重松鷹泰の推薦文は省かれている。

本稿では、津留による詳細な検討と分析を辿り直し、登喜子の日記の読み直しを試みる。

2 津留宏の『一少女の成長 小さな魂の記録の分析』について

津留は大学卒業後、旧制女子専門学校の教職にあるとき、一生徒が書いた回顧録が目にとまり、かねてから「ごく平凡な人の一生の変化を心理学的に眺める仕事を」したいと考えていたところ、「意外に早くこれを試みる機会に恵まれたと感じた」（津留1980：3）と述べ、「彼女の豊富に残した日記・綴方・随筆・手紙・成績物など」（津留1980：1）、子ども時代の図画、身体発育の記録なども含め登喜子から多くの資料の提供を受けたと述べている。また津留は、偶然にも彼女の東京での生育環境や小学校、女学校のみならず、記録に登場する2、3人の人物についても個人的な知人であったこと、また不明曖昧な点については登喜子自身が熱心に質問に答え、また昔の彼女を知る関係者からも当時を振り返る手紙を得て、日記資料の欠点を十分補えると考え、彼女が昭和20年に（津留の勤める）女子専門学校国文科に合格するまでの精神生活を、これらの資料を総合して、青年期の心理的発達の観点から再構成している。ちなみに、新版の献辞には「今は学位をとり、りっぱな大学教授に成長された菊池登喜子氏に捧げる」と記されていることを書き添えておく。

3 心理的資料としての日記

伊藤・松村・大村編『心理技術事典』の「日記的記録法」の項目には、「日記は児童や青年の心理を知る上にきわめて貴重な資料の1つになる。…（中略）…だれにも見せる目的のものではなく、たんねんに書かれたものならば資料として価値があるが、それは至って少なく、また得がたい」とし、学校に提出したり、誰かに見せるために書かれたものや、いい加減に書かれたものでは資料的価値は乏しく、家族などに読まれないように慎重に隠しながら、嘘偽りなく誠実に内面を吐露したものがこそ貴重な資料となりうるものであり、それこそが日記資料の特質だとしている。

しかし、そうした日記が入手困難な理由として、「①青年の日記は他人に見せたくないような心の奥の秘密まで書きこまれてあること、②青年が日記を書いている問題に直面し、自分の感情が過大に誇張されている場合が多いこと、③ややもすれば、日記を書く青年に内向的傾向が強いものが多いこと」（伊藤・松村・大村1977：83-4）など、決して他人に見せられないことが書かれているため、秘匿され続けてしまう可能性が高く、かつ日記を好んで書くような青年は、そもそも内向的傾向があり、丹精込めて書き溜めた日記を提供してくれることなど、たやすく期待できないことを、百編を超える青年日記を蒐集しその精神生活を解明したシャルロット・ビューラーの指摘として紹介している。

津留は、②については、登喜子本人や過去の友人などに質問することを通じて、かなり注意深く資料を扱っており、①と③にかんしては、すでに述べたとおり、登喜子は非常にオープンで協力的であったことから、津留は稀少な「機会に恵まれたと感じた」のだろう。しかしながら、やはり日記というものが、極めて私性の強い資料であり、自分の回顧録に強い関心を寄せてくれた津留の研究意図を、登喜子が十分理解したとしても、果たして見せたくない、隠しておきたい、あるいは削除したいものはなかったのか、やはり疑問に感じなくはないが、この本にはこれ以上の説明や理由は述べられていない。しかし、日記をつける営みが生み出す自我にかんする精神分析的議論の力を借りて、十分ではないにせよ、いくらか仮説的なことを紹介して

おきたい。

ヨーロッパの日記の精神分析的アプローチにおいてベアトリス・ディディエは、そこに記された「『自我』はまた無意識でもある」とし、「日記の一機能は、日記作者が文章を使って自己分析をほどこすことによって、まさにこの領域の露出を可能にすること」(Didier 1976=1987: 160)であり、日記の書き手は、日記の文章が表現し創造する、自らの自我である内面世界のなかで、無意識を意識化してエクリチュールにしていると考える。さらにディディエはつぎのように述べる。「日記作者は一方では日記を注意深く隠し、他方ではその出版を企てる」。「日記は自我の逆説をも知っている。すなわち内部と外部とのあの弁証法を。自我とは、…(中略)…内部と内面性の領分、したがって秘密地帯の領分である。しかし真に存在するためには、自我は他の『自我』に出会う必要があり、それゆえ自己を外在化し、外部に立ち向かわなければならない」。「実際、出版は多少とも無意識に、日記の袋小路と自我の矛盾の出口のようにおもわれる」。かたちの定まらなかった日記のエクリチュールが、印刷されることによって、また、「不確かであった自我が、公衆の目の前で凝固し、確かなものになる。そしてそれは作家の真の自我となるだろう」(Didier 1976=1987: 170-1)。「無限に分裂させられた多数の『自我』は、いかに多様な形をとるとはいえ、出版され本になることで一種の統一性を獲得するこの著述のなかで、再び集結するのである。日記の執筆が果たしうる精神分析的治療は、日記が出版される日に完了する。あるいは少なくとも一段階がのり越えられたのである」(Didier 1976=1987: 172)と述べるディディエは、自らの日記を出版しようという出版社に出会うことができれば、「ほくはそれによって過去を清算することができ」と語るデュ・ボスの興味深い一節を引用している。つまり、ディディエによれば、日記作者はおのれの生きづらさ、生きる力の乏しさを公にすることで、母胎的宇宙の袋小路からの抜け出ることが可能になるのというのである(Didier 1976=1987: 172)。

後段で触れるが、登紀子の日記は、危機を乗り越えた後に、あきらかに一つの終わりを迎えている。ディディエが提示した日記作者による日記の出版が、日記を書く行為が無意識を意識化し、それがエクリチュールとなり、内部と外部の対立を乗り越え、確かな自我を得て、新たな段階に踏み出していく治療的意味を持つというならば、登紀子が自分の少女・青春期の日記や綴方などをあらいざらい津留に開示し、どんな質問にも積極的に答え自己の客観化にもはやひるむことがなかったと思われるのは、彼女にとってもそれが分析的治療の締めくくりのプロセスであったからではない

かと筆者は考える。

再び、『心理技術事典』に戻り、「日記的記録法」の項のつづきをみると、「青年の内面生活の展開は、ふつう日記や手紙の形で表現の機会を持つことである。自己をいとおしみ、自己に語りかけ、それによって自己をより高く形成しようとするものが青年の日記である。したがって、日記は自己反省であるとともに慰めであり、自己批判であると同時に自己弁護である。…(中略)…このように同一個人の成長発達を縦断的に長期にわたって追跡する場合に必要な記録である」(伊藤・松村・大村 1977: 84)としている。

津留は、児童期の日記は、義務的で自発的でなく、先生や両親などの勧めに応じたもので、勉強と類似した善い行ないのようなものにすぎないとし、またその日にしたことを来る日も来る日も事実列挙するものであり、自己の内面を見つめる態度がまだ育っていないなどとして、心理学者の間では研究資料としてあまり高く評価されていないとしている。しかし、生活行動の資料としては信頼性が高く、発達著しい時期であるので、生活行動、観察態度、記述量、表現能力などの発達過程を総合的に見ることに利用可能だとし、登喜子の小学校時代の日記は、これに準じて分析されている。

一方、青年期の日記は、青年期の心理的資料として日記を重視したビューラーを踏襲するものの、エドアルト・シュブランガーが青年の感情・感情が一過性であることや主観の動揺の激しさ、意味連関性の欠如や背景の省略、あまりに自由奔放でむらが多いことなどから、日記の無批判な利用を戒めたことを引き合いにし、登喜子の日記の一般的短所は認めつつ、その鋭い観察や客観的描写などの長所をあげ、客観的状況は補助的な資料で補うとし、日記資料の提示の意義を説いたビューラーにならって、「青年の日記それ自体に語らせるより勝る表現はできない」と述べ、日記原文の引用の意義を強調している(津留 1980: 17-8)。

本稿で取り上げる津留の日記研究の第一の主要な資料となったのは、小学校1年(昭和11年)から女学校4年(昭和20年)までの日記である。登喜子は小学校1年で、すでに192日分の日記を書いており、2、3年では200日を超え、4、5、6年では351日、340日、309日の日記を残している。また友人関係に悩んだ女学校2年では、259日とやや減らしたものの、学徒労働員や空襲が激化した昭和19年の3年生においては295日分の日記を残している。昭和20年には、いよいよ空襲の激しさも増し、姉の一人と疎開することとなり、ようやく得た友人との強い絆を失ってしまう。しかも、疎開先で世話になった「小父さん」は、

当初謹厳で立派な人物に見えたのだが、彼が女中に産ませた少女と仲良くなり互いに同情を寄せあつたばかりに、登喜子は疎まれることとなり、彼女だけ荒廃した東京に帰されることになる。やがて敗戦を迎え、東京の街も、学校も、家庭も荒みきり、生活の惨めな暗さが、彼女の人生嫌悪を急速に深刻にしていく中、ある日、家族が皆で登喜子の「研究会なるもの」を開いている場面に出くわし、自殺を決意して実行してしまうが、この年は313日分の日記を記している。

紀田順一郎は、人々が「戦時下に綴った日記を読み返すにつけ、あの過酷な日々によくも営々と書き続けることができたものだと思う。…(中略)…絶え間ない空襲や食糧難に悩まされ、生命の危険に脅かされながら、わずかに残った気力をふりしぼって書きつけた」(紀田 1995 : 204) のだろうと述べている。ところが、ディディエは、日記の孤独のなかで本当の自分の内的世界、精神生活が構築されると考える「日記主義」(Didier 1976=1987 : 79) というものは、世界との絶縁、断絶と結びついているとして、アンネ・フランクの日記の例を挙げて、「追いつめられた人種に属しているために、自分が排除されていると感ずることもある」(Didier 1976=1987 : 79) と述べ、アンネの日記の持つ意義はここにあるとしている。彼女は、ユダヤ人としてだけでなく、何の力も持たない少女であり、本人が述べているように家族には恵まれていたが、やがて始まる潜伏生活では、ナチスと戦争の脅威による外的幽閉状況だけでなく、隠れ家のなかの大人たちに反発、衝突し、大人同士の諍いにさらされる日々において、日記によって自分自身のなかに引きこもることで、精神生活の自由を求めることになる。アンネは、誕生日にプレゼントされた日記帳の始めにつきのように記している。「あなたにやら、これまでだれにも話せなかったことを、すっかり打ち明けられそうです。どうかわたしのために、大きな心の支えと慰めになってくださいますように」(Frank 1952=1986 : 10) と。

「日記自体が毎夜作者が会いにゆく『友』であり、打ち明け話の相手であり、ほとんどが恋人になる」(Didier 1976=1987 : 133) とディディエが述べているように、自己の外部が極限的状况であったからこそ、日記を書かずにはいられない状態にあったとも考えられるのではないだろうか。

昭和19年8月中旬から登紀子は学徒勤労員で軍需工場に送られ、工場も激しい空襲を受け、日々命の危険にさらされるが、精神は明るく、生活は活気を帯び、11,12月のあいだに1年あまりブランクになっていた「秘密のノート」に啄木の歌に触発され、和歌、俳句などを329首も書いていることに、津留も驚嘆し、「急激な詩情の活動は注目に値する」と述べている(津

留 1980 : 183)。

4 津留の日記研究の問題設定

登喜子の日記研究の目的について、「一見目立たないがかなり個性的な少女の誕生から幼児期・児童期を経て女学校をおえるまでの精神の発達過程をたどってみた。一つのいたいけな魂が、いかに育ち、いかに個性を形成してゆくか。彼女の豊富な日記…(中略)…などの貴重な資料を通して、私は自分の解釈を進めてゆく。その立場は発達心理学的であるが、…(中略)…一人の少女の心の成長してゆく全体の姿をできるだけありのままに再現することである」(津留 1950 : 5) とはしがきで述べている。

しかし、問題と方法においては、「成長史研究の対象に扱ったのは若干の理由がある」。「彼女がその成長過程において、多くの問題性を持って」おり、「一見平凡な目立たない少女であるが、少しつき合えばかなり個性的なことに気付く」と津留は述べ、経済的・教育的にも代表的中流家庭に育ち有能な母の熱心な教育的指導を受け、頭脳明晰、観察眼もするどいが、「自我の独立する青年期に入って、明らかに社会への適応に失敗し、遂に女学校四年生の時、自殺を謀るに至っている。その原因は遠く幼児期から遡って解明されなければならない」(津留 1950 : 5) としている。

さらに、登紀子は、「今次大戦を中にはさんで、最も時代的に生きていることである。軍国主義の最盛期に小学校を卒え、鋭敏な青年期の感受性の中に東京で苛烈な戦争を体験し、その間、工場動員や空襲や疎開等の一通りの試練も受けている。更に彼女の家は敗戦に伴う没落階級の小さな雛形であり、特に軍人であった父親の老老がそれに伴ったので一層惨めである。豊かな幼・児童期には夢想だにしなかった深刻な窮乏を敗戦直後から迎えている。その時代と生活の激変を、若い鋭い彼女がいかに受け取り、いかに対処して」いったのか、そのことを、同時代の多くの青年にとっても共通の課題として、日記などの個人史的資料から検討しようということであった(津留 1950 : 5)。

登喜子から提供された資料などから、津留が再構成していく彼女の発達の歴史は、一人の少女の内面の成長、自我の確立に寄り添ったものになっていることは確かである。一人の少女の誕生から、パーソナリティが形成されるまでの精神発達／成長史を「たどってきた後に残るものは、本人に対する深い人間的な愛着である」とし、「性格形成上に働いた教育心理的な問題にいろいろな感慨が湧く」と津留は述べている。また、ある人間の行動や心理的構造を事例史的にとらえるためには、「断片的なものの単なる時間的集積」とせず、

個性によって貫かれた時間的関連」において「了解」（シュプランガー）的に理解されなければならず、そのように捉えるときはじめて、登喜子の「深刻な憂鬱も人生への嫌悪も母親への強い愛着も正しく理解できる」（津留 1980 : 237）としている。

しかし、本書のあとがきに「本事例における性格形成上の問題」を論じるとして、登喜子の性格形成上の問題として、異常性があるということはまったく言えないし、環境・経歴も特殊なものとは言えない、にもかかわらず、「多くの問題性を発見するのに驚くのである」（津留 1980 : 229）と津留は述べる。

まず、登喜子は幼児期から病弱であり、数え 4 歳で気管支炎をわずらうなど児童期の間ずっと病弱で、家族のなかで、ときに学校でも特別扱いを受け、人生の最初の時期に非社会的な性格をつくってしまったとしている。また、母親は有能で優れていたが、勝気で特別なプライドをもって娘たちを教育し、最優秀の成績を求め、その圧力のせいか、娘たちは神経質になり、独善的で、ときとして偽善的でさえあったと津留はみている。こうした教育的態度の場合、学校生活は競争の場でしかなく「社会人としての基礎的陶冶をするところとは考えない」。社会生活、交友関係は二の次で、子どもの社会的態度における欠陥や「掃除当番をまじめに果たしているか」（登喜子はよく掃除をさぼっていたらしい）ということより、成績が劣ることが重大問題で、このような場合、他人への同情、協調性、社会的責任感などの代わりに利己的態度や実践から遊離した観念性、人の欠点を喜ぶなどの反社会的態度が養われやすく、「社会的訓練の未熟さのゆえに、社会的独立の時期において深刻な障害に逢着する」と津留は述べる。

「登喜子の幼児童期の非社会的な生活から養われた反社会的態度がもたらす不幸」は、「青年期の成長が、必然的に強く友人を求めながらも、…（中略）…女学生時代における友人関係は失敗の連続だった。そしてこのことが彼女を激しく動揺させ、苦悩させ虚無的にさえしたのだが、母親もこの悩みを十分理解できず、（母は）「自分の愛によって代え得るものと思っていた」（津留 1980 : 233-4）と津留は考えている。

かいつまんで、以上に挙げたことを、「多分に感情的でありながら外に冷たい、理知的に見える登喜子の性格形成過程」の問題点としてとらえ、「これらの問題は、特にわが国の青少年の性格形成の上にも広くみられ」、「それはわが国の親たちの子供に対する態度を反映し」、「特に幼児童期において、もっと社会的訓練という面を重視して子供を育てなければならない」と津留は戒める。自我の完成によって独立的になり、以前から比べると外部への依存性を示さなくなった「登

喜子はその優れた頭脳によって、一応救われてゆくけれど、その反社会的性格については今後もなお問題となろう」（津留 1980 : 235）とも述べている。

津留の用いる非社会的／反社会的という、強すぎる表現に筆者はかなり戸惑うが、現代的には、やや自閉的であるとか、コミュニケーション能力や協調性などの非認知的能力が十分に育っていないといった表現に落ち着くのもかもしれない。しかし、津留は、「精神の発達という時、それは一つの社会的価値観より眺められ」、「私はそれを一応『社会への好ましき適応』と措定し、その見地から登喜子の場合を批判している」（津留 1980 : 11）と述べる。

パーソナリティは、「社会的場において形成される個人の社会的構え」であり、「社会に対する人格的な適応態度である」。だから、精神発達は、パーソナリティ形成の過程でもあり、好ましい適応は好ましいパーソナリティをつくることにほかならず（津留 1980 : 235）、津留は、そうなることが好ましいと締めくくっているとみて差し支えないと筆者は考える。つまり、本書は、主に日記や綴方資料などを用いて、時系列的に登喜子の成長／精神発達を追いながら、彼女に起こるさまざまな出来事、それに対する捉え方、わきおこるさまざまな感情などを、津留の上に述べた観点からパーソナリティ形成上の問題点として指摘していくものになっている。

5 登喜子の小学校時代

登喜子は昭和 4 年 7 月に生まれ、当時父は 49 歳、母は 38 歳、3 歳上と 2 歳上の姉と弟がいる。父は兵学校出身の海軍大佐だが、彼女の誕生当時、もう予備役であった。終戦まで海軍省嘱託、軍需会社の顧問などを務めたが生活力に乏しかったようである。母は二度目の妻であり、女学校時代は秀才で女子高等師範技芸科を出て、結婚するまで女学校の裁縫の教員を勤め、その後も再び勤め、また終戦後、夫が軍属であったことが仇となり、一家が経済的に立ち行かなくなったとき、再び教職に戻っている。この母は夫を自分にとっては不足とみていて、子どもたちが父親を軽蔑する原因をつくったとし、津留は彼女に対してなかなか手厳しい（津留 1980 : 235）。

また、父親が登紀子の母と再婚したとき、すでに 45 歳で、彼が、病没した前妻と、その間に生まれ肺病で 15 歳で亡くなった男児（登紀子からみて継兄）への追憶を断ち切れなかったことが、後妻との融和を妨げたと津留は見ている（津留 1980 : 28）。また、2 歳ほど離れた下の弟は乳児期に小児麻痺になり、満 5 歳まで歩行が困難であった。こうしたことも、家庭

を暗くした一因であったと津留は述べている（津留 1980 : 29）。

登喜子については、小学校時代の担任から手紙をもらっていて、精神的に強く信念をもっているようだが、口数少なく無邪気な子どもらしさを欠き、孤独で頭が良すぎるせいや友だちと楽しむことを知らず、学友もあまり親しみを持たなかったようだと言っている（津留 1980 : 37）。的確な観察かもしれないが、このように担任に見られていたとすれば、子ども心にはかなりショックではなからうか。小学校時代の日記からも読み取れるが、登紀子は病弱で小児喘息を起しやすく、母親は遠足などは休むよう勧めたようであり、遅刻や長期の病欠もしばしばあって、そのつと疎外感を感じていたようであるが、津留は、こうしたことが、家での手伝いを避け、姉たちに任せきりにしたことが、学校では当番逃げもよくしたという自己中心的な性格につながったと考えている（津留 1980 : 33）。

小学校 6 年 3 学期に女学校入学準備のための 2 回の人物試問の結果が残っており、1 回目の結果はかんばしくなく、2 回目は対策を講じ全優となっているが、1 回目の評価では、「落ち着きがたりない、早口なり」、「くつに注意、口のまわりがきたない」と指摘されており、行動面の粗雑さ、容姿などに頓着しない様子など、この頃の登喜子の自然な姿がうかがえると津留は述べている（津留 1980 : 36-7）。

小学校時代の登喜子の書いたものについて、くわしく述べる余裕がないが、小学校 1 年生で、正月を迎えた様子や夏休みについて日記を書いており、「報告的」であるが、「正確な観察と表現」をもった書く能力が十分にそなわっていると津留は述べている（津留 1980 : 46-7）。

3 年生になると、綴り方作品では、分量や観察の正確さに加え、叙述の緻密さ、会話体の自然さなど驚くほどの上達があり、「当時の彼女の家庭の柔らかい少女的な雰囲気さえ匂い出ている」ようだと言っている（津留 1980 : 72）。

4 年生になると、幼児期を脱し、児童期に入り、綴り方作品に「折りおりの感情や修飾も現れ、構成にも注意されて良い文にしようという意図がますますはっきり生じている」。「品格があり、成人の作家の文体さえ思わせる」「自己の主観の生じない客観的描写」ができる成人とよく似た態度を示している（津留 1980 : 80）。自然の描写も、「自然から離れ、自然を眺めている自我がある。…（中略）…自然と渾然融合している児童前期以前の姿ではない。一方、この子供らしくないまでにまとまって、落ち着いた創作態度の陰に登喜子の強い自尊心も感じられる。…（中略）…小さいながらもしっかりまとまった一人の少女の姿に成長して

きている」と津留は述べている（津留 1980 : 90-1）。

ところが、5 年生になると、両親や教師に対して軽い不信を感じ始める。たとえば、11 月 16 日の日記では、担任に忘れ物について叱られて、「昨日持って来たから今日はいいと思っていたのに。別に烈しくお叱りにならなかったが私の心は恥と怒と悲しみで狂いそうなくらいだった。…（中略）…何で叱る必要があるか。けれど一時間、心を鎮めたらやっとな静かになった」（津留 1980 : 97）と記している。また、登紀子は回顧録のなかで「算術の教授法などに不満をおぼえて家へ帰って母に話すと母も同意したので益々、教師への不信を感じた。母は小学校教員風情を軽蔑していた風だった」（津留 1980 : 98）といったように書いている。

また、自分だけ罰を逃れたいばかりに、体の不調を理由にした言い逃れをするようにもなっている。津留は、登喜子の個性が、ようやく鮮明になりだしたと述べ（津留 1980 : 100）、児童期の一般的特性に覆われていた登喜子の性格がしだいに青年期の個性化の時期に足を踏み入れ始め、「綴りが素直な調子で書けなくなり、しだいに寡作になっていった。そして自分の作品を級友の前で読まれることをひどく嫌うようになった。…（中略）…後の批評の時間に教師に読まれることを頑強に拒んだ」こともあったと津留は述べている（津留 1980 : 104）。

昭和 16 年 4 月から、小学校は国民学校となり、登喜子は 6 年生になる。津留は、「『小学校』というこのかわいらしいなじみ深いことばを捨てて、国民学校という生堅な翻訳語を強いて唱えしめるほど、当時の国粹主義は狂躁的になっていた。小学校の教育までが、幼い者の夢を踏みにじる対外的憎悪の教育へと転落していった。それは個人の尊重と、人間性に対する明るい肯定を捨てた中世的な鍛える教育への逆行でもあった。この年の 12 月 8 日、日米開戦となるまで、日本国民は不気味な緊張と焦燥の中に戦争への道へ駆り立てられていった」と述べている（津留 1980 : 107-8）。

登喜子の家庭は、父がかつての海軍大佐の肩書を活用し、軍の恩恵の下で生活してきたので、時勢には単純に協力的だが、特別に国家意識を子どもたちに教え込むこともなかったと津留は述べているが、小学 5 年生のとき姉弟で家庭軍隊をつくり、軍人勅諭をまねた家庭軍人生活五訓を定めた（津留 1980 : 96）ということがある、大人が思う以上に、子どもたちは軍国主義を自ら内面化していたのではないかと筆者は感じる。生活物資はしばらく比較的めぐまれており、学校生活でさかんになった体錬以外は、時勢の圧力をほとんど感じることはなかったようであるが、日記の端にわが国の戦果など書き込むようなことはあったと津留は述べている（津留 1980 : 108）。

発達心理学的な視点からいえば、「かなりナイーブに思春期的心性の芽ばえを見ることができる」ようになり、綴方は「ますます寡作になり」、「教師に注意されたほどである」。津留はこれを「児童期の客観的描写の行きづまりであり、青年期の主情的な文章への転換期と見」ている。「叙述がどうしても自己表現的になるので、いっそう書きにくく」、「皆の前で自分の文を読まれることを恥ずかしがり出したのも、それは自己をさらけ出すことになるからである」（津留 1980 : 109-10）と津留は分析している。

登喜子は女学校入試準備で算数の指導を通じて接することが多くなった若い先生に淡い恋心を抱き、他の生徒と親しくしているのを見ると不安や焦燥を覚えるようになったと津留は述べている。日記にはこの先生への思いが何度も綴られるが、3月になると入試の準備や卒業前の慌ただしさからか、この先生のことは日記にすっかり登場しなくなり、自然と疎遠になったようであるが、この体験が「登喜子の心を飛躍的に複雑にし、今までにない秘密の意識を持たしめたことは否定できない」（津留 1980 : 121）と津留は見ている。

やがて、姉二人が通っている都立のある高女を受験し、合格発表を見に行ったときのことを、小学校時代最後の綴方で書き残している。津留は、その完璧な情景描写を綴方最後の作品にふさわしいと評している（津留 1980 : 122）。

6 登喜子の女学校時代

登喜子が入学した女学校は都内でも最も優秀な都立高女のひとつで、現在の新制中学校とは大きく異なり、「環境の変化が精神の発達を誘発する点で、かつての中等学校進学は著しい効果があった」。「小学校と旧中等学校の間にはあらゆる点で質的に大きな開きがあった。中等学校に進んだ者は、しばらくはその高等な自律的な空気と賢そうな新しい級友たちが、冷たくなじみ薄く感じられてとまどうが、やがてそこが小学校より一段誇らしい選択された勉学の場所であることを喜ぶようになる。女学校の制服は少女の憧れでもあり、誇りでもある。…（中略）…子供から成人への最も神秘的な発達過程をつつむ記念すべき制服である」（津留 1980 : 130）と津留は解説しており、登喜子も4月4日の日記において「入学式の日だ。制服を着るのが嬉しい。一段偉くなった様で胸を張って歩く。お父様に連れられて憧れの校門をくぐる。…（中略）…早く授業が受けたい。明日が日曜でないといいのに。女学生になったら『努力』の二文字を掲げて一生懸命務めるつもりだ。私の将来は明るい希望にもえ立っている」（津留 1980 : 132-3）と記している。

この年は昭和17年であり、「緒戦の戦果の最もあがった年であり国内も活気にあふれ、いわば旧日本の児童期的な夢が極度に膨張した頃だった。女学生たちの純真な愛国心は、かなり極端になりつつあった国粹主義教育にも一応随順したが、やはりそれは彼女たちの本質には触れ得ず、内面生活は元と変わらぬ女学生の小さな個人的、身辺的な自由の世界において展開している」（津留 1980 : 132）と津留は振り返っている。

登喜子の日記も「石井先生の物象のお話がさっぱりよくわからない。頭がよすぎるのもこっちには災難だ。体操の時したメヂンボールがとても面白かった。かけっこをやらされるかとビクビクしてた所だったから」。「どうも朝、早く起きられない。往き、那子お姉様と何だか気が合わなくて前後に別々に来た。私は孤独が欲しくなった。『一人ぼっち』、「シャクにさわってあの時はよっぽどうちのめしてやろうかと思った。今考えるともったいい気味なことをいってやりたかった。私は那子お姉様がきらいだ。食いしんぼう、横着、高飛車！」といった調子で、津留は「自己中心的な書き方！これはもはや他人に理解させることを予期していない、自分が自分に語る青年期の日記の体裁になりつつある」（津留 1980 : 134-5）と述べている。

しかし、「やがてこの頃から登喜子の心が急に激しい動揺の嵐の中に投げられ」たと津留はみている。姉妹の仲は、以前からあまりよくなかったが、姉妹はこの頃相次いで青年期に入り、互いに「いっそう主我的、かつ批判的になり出したため」、「冷たい戦争に陥りつつあった」ところ、9月末のある晩、喘息が起きて登喜子がひどく気分が憂鬱なときに、両親と姉たちから非難と攻撃を受け、母も味方してくれず、強い孤立感を味わうことになる。この日の日記には、大きく「苦悶」と書き、新たに「秘密のノート」と名付けたものには、「死」と題して、「人を恨むな 人を恨むな 私は自殺なんかこわくて出来ない 誰かがこの胸をするとい短剣で ぐさりと突いてくれればよい それともこうして眠ったまま 永久に目覚めないといい …（中略）… 神様 お願いします 私を墓場へ連れて行って下さい」（津留 1980 : 137-8）と記している。

登喜子は暗鬱な気分が2、3日続いたあと、気管支炎がひどくなり、3週間ほど病床につくことになり、やっと登校してみると、一番の親友だと思っていた宮崎さんが池内さんと親しくなっており、登喜子は取り残され、かつてない孤独と思慕に悩まされる。彼女の内面は急激に複雑さを増していったと津留は述べる。彼女の心の変化がはっきりと目立ってくるにつれ、「日記の記述は貧弱になり、むしろ自由な『秘密のノート』への記述が多くなってくる」。これまでの日記は、出来事を中心に書くため、いまやその枠には収まらなく

なっており、自分の感情を吐露するには自由なノートの方が都合よく、記述も思うままに自由詩や独白が多い。こうして、11月頃の日記は、「はっきりと主情的なものへと転換」し、このかんは、彼女の精神が明確に児童期から青年期への転換期だったと津留は分析している（津留 1980:139）。

淋しく（10月24日記） 私は誰にも愛されないのでこちらから愛しても 向うが離れてゆくのだもの マル（飼犬の名）だってそうだし、宮崎さんだって、周囲がみんな気まぐれなのだ 私は ひとりで生きてゆくより外に 仕方がない（津留 1980:143）

宮崎さんへの手紙（11月2日記、未函） 宮崎さん 私は今、非常に悩んでいます、頭がわるいような悩みなのです。あなたはこの悩みがわかって下さるでしょうか。私はつくづく後悔しています。この間、気管支カタルなんかでお休みしなければよかったと思っているのです。何故とって——私のお休みしている間に「私の宮崎さん」を池内さんにとられてしまったのですもの。…（中略）…ただただ湧いてくるのは涙です。…（中略）…私はこの頃死ということ深く考えるようになりました。…（中略）…しかし私には勇気がありません。…（中略）…あなたが「私の照ちゃん（登喜子の愛称）」と呼びかけて下さったら私はどんなに嬉しいでしょう。ただただお手紙を待ちます。私の宮崎さんへ（津留 1980:143-4）

11月9日 死にたい 死にたい！ 何を泣くんだ、…（中略）…なぜ泣くんだ、馬鹿！ …（中略）…みんな自分を愛してくれないんだ！ 涙で字がかすむ（津留 1980:144-5）

このように書かれたものだけ読むと「登喜子の孤独感や人生に対する否定的気分の急激な高まりにはむしろ驚くほどであるが、…（中略）…主我的な子の受けた強いショックであることを理解する一方、また、これらの記録はこうした気分のクライマックスにおいて書かれたものであることに留意」すべきだと津留は述べ、そのうちけりりと忘れたようになって、他愛のないことに熱狂したりするもので、感情的な動揺期の特色だとしている（津留 1980:145）。登喜子は、宮崎さんを取り戻そうとし、池内さんを恨み、孤独と絶望にさいなまれるが、やがて3人で仲良くなり、そうかと思うと宮崎さんと絶交になり、その反発と代償として、池内さんとさかんに手紙のやりとりをはじめ。

少し前まで、絶望し、死にたい、とまで記していたのが、打ってかわって、自嘲も交じったふざけ調子の手紙を池内さんに送っている。

1月26日 アノ人（宮崎さんのこと）のどこが好きだったのでしょうか。その頃の私は確にきちがいじみておりました。たった一人のあの人を失って外に友達もない私はそれが怖かったです。池内さん、あなたがあの人が好きであろうと嫌いであろうと私にとっては何の関係もないことです。私、今は本当にアノ人がきらいなんですもの。一とう好きなのはあなたです。宮崎さんがあなたに心移したのも今考えると当然だと思います。あなたには私など及びもつかない徳があるんですもの。とにかくこのことは「恋愛小説」にしたらずい面白いものが出来るとお思いにならない？ 結局勝利者はあなたです。ふみ子様 いつまでも仲よくしてね。（津留 1980:152-3）

登喜子の池内さんへの手紙は、開けっぴろげに「大好きな大好きな池内さん」（津留 1980:150）などと何度も繰り返すような、告白とも、おどけ調子ともとれるようなものが何通も書かれている。津留は、「この告白じみた、真剣なような、ふざけたような、機知とユーモアといきいきとした感情とに満ちた女学生の手紙の中に、何かかつての日本の女学生の自由な、真実な姿を見たような気がする」（津留 1980:154）と述べている。津留の念頭に浮かぶのは、旧制の中等教育の女学校の少女たち——本田和子が、描きだした家父長制と良妻賢母教育に囲われ、逆説的に社会から浮遊する特権的な存在となった女学生たちの姿なのだろうか（本田 1990）。

「女学生生活においては生活に主導的意味を持つ仕事、あるいは目標——例えば男学生における進学準備の如き——がほとんどない。主なる関心は日常生活の幸不幸に限られ、愛情の問題はその決定的要素となる」（津留 1980:161）と津留は述べ、女学生たちが、本人らの意思とは関わりなく、自らの将来と国家の将来を重ね合わせることでできた男子学生とは非対称な、囲いの中で浮遊するほかない条件をつくり出していた当時の学校制度のあり方を指摘している。

登喜子は2年生になり、宮崎さんとの仲を回復するものの、クラス替えもあり、結局また疎遠になり、今度は新しい級友たちに心を惹かれ、新たに末松さんに夢中になるのだが、やがて転校してしまう。仕方なく宮崎さんと池内さんのもとに戻ろうとするが、彼女らも新しい交友関係をつくっていて、登喜子が割って

入る余地はなかったようである。

9月6日 …ああ、池内さん、二人の間にはもうすでに埋めることの出来ない大きな溝が出来てしまった。よくわかっているのだ。相手の心が話すのもばからしい位よくわかっているのにその溝がとびこせない。校長室の床を磨きながら甘い気持ちで末松さんを思い出した。人生は後悔の連続だ。ああ淋しい。なんだって私は暗い方へ暗い方へと自分を落としていくような性質に生まれついたのだろう。(津留 1980 : 158)

9月21日 ああ何だか分からない。めちゃくちゃになってしまえと思う。実際私は妙な人間だ。或は自分で妙な人間を作っているのかも知れない。私はやっぱりひとりでいいのだと思う。那子お姉様を羨しがらる必要はない。友達の中で窮屈な思いをしているよりひとりで向きたい方を向き、言いたいことを口走り考え悲観したいことを悲観している方がずーっと楽だ。お母様にさえ窮屈を感じずる自分だもの。(津留 1980 : 158)

9月23日以降、また気管支炎で床に臥すことになってしまい約1か月日記に空白が生じる。10月21日に再び日記をつけ始めるが、「あきらめを含んだ沈んだ調子に落ち着いてきて、以前ほど浮ついた動揺や悩みも少なくなってきた。錯綜をきわめた友人関係も、一応整理され、特別な友もなくなって、さびしく秋に病む登喜子に、悲哀と孤独の境遇が彼女の心を初めて鍛えたらしい。その気分はあきらめの沈んだ調子だが、自我を内的に深めてくれた」(津留 1980 : 160)と津留は分析している。しかし、孤独になった登喜子は、11月7日に自殺のための遺言状を書く。津留は、本当に死ぬことを考えていたというより、感傷的な創作欲が手を貸したところもあり、文章には文学的な銜いがみられ、「悩めること自体に甘える気分」もあったのではないかとみている(津留 1980 : 163)。

4月6日 私の心はほぐれない。教室に入るのが敵の中へ入る様な気がする。誰かに話しかけようと思って舌が縛られたようにものが云えない。自分が自分の思うとおりにならないのは何てじれったくかなしいものだろう！…(中略)…私は病気かも知れないと思う。ヒステリーだったらいいと思う。そしたら治せばいいのだもの。だけどこれが私の性質なのだったら一生こうしていなければならぬ。ああ、何とかして自由に喋れる様になりたい。私は始終何かの影にお

びえてるようだ。誰かが「喋べると殺すぞ」と睨んでる様な気がする。(津留 1980 : 171)

4月29日 …だけど私はお母さま以外誰も要らない。お姉さまたちに可愛がって貰えればそれにこしたことはないけれど、憎まれたって大した事に思わない。私にはお母さまがあるんだもの。私はひとりぼっちで生きていくように生まれついているのだ。誰も愛さないし愛されもしない。私が今までに心から愛したのはお母さまだけだし、私を今まで本当に愛したのはお母さまひとりだ。ひとりぼっちでいいと思う。結局それが一番気楽だ。少しはさびしい事はあっても。お父様は修身みたいなことばかりいってちっとも私を理解して下さらない。…(中略)…私を理解して下さっているのはひろい世の中にお母さまだけだ。(津留 1980 : 172)

暗い気持ちが晴れぬまま3年生になるが、戦況の緊迫にともない生活物資の不足、食生活の急激な逼迫が家族の生活を苦しめるようになる。そうした社会的圧迫もあり、対人恐怖症のような症状まで示すようになる(津留 1980 : 168)。こうした状況に登喜子がなんとか耐えられたのは、母親の愛情のおかげであり、また、彼女自身も、「ただ一人の自我の擁護者として」、退行的に母に対する愛情の要求を強めていったと津留は述べている(津留 1980 : 169-70)。

7 学徒動員と疎開、そして敗戦

登喜子のこの行き詰まった状況の転機となったのは、意外にも学徒勤労働員であったと津留はみている。国内の労働力不足を補うため、昭和16年、国民勤労働国協力令によって軍需工場への動員が始まり、翌々年には学徒出陣、昭和19年には学徒勤労働員令によって中学校以上の全員が工場などに動員されることになったが、登喜子も8月中旬から学友とともに東京郊外のN航空機制作所に配置される。この新しい環境の刺激が彼女の気持ちを変え、視野を広げ、「何よりもよいことはもっと広い生氣ある友人関係に彼女を投じてくれた」ことで、「徐々に生氣を取り戻し、やがて活発で才気走った都会の女学生らしい交友生活を楽しむようになる」。登喜子の心が健康を取り戻したのは、「よき友情に囲まれ」たことによるものであり、それは生活を幸福にしてくれた。しかし、激しい空襲で家庭も街もいよいよ荒廃し、「母親と父親とは生活の重圧に負けて老いてゆく」(津留 1980 : 175)。

長く戦時下であり、かつ戦況はますます厳しく、子

どもや若者に対して全体主義的、国粋主義的教育が行われてきたが、「女学生たちの生活は、これらに対し義務的、でき得れば逃避的で、その主たる関心は相変わらず自己身辺的なものであった」。「生活の主な悩みは、戦争の前途ではなくて友情の問題であった」。「激しい空襲下でも親友とともに壕にいる時は、はしゃぎたいような気分になったのである」と津留は述べている（津留 1980 : 177）。

とはいえ、厳しい戦局の影響はより一層深刻で、登喜子の家庭でも「両親とも過去の威厳と寛容の余裕を急速に失ってゆく」。「父親への強い軽蔑と反比例して、一人苦闘する母親——と登喜子には思われた——に対しては、ますます同情を深めている」。学校での孤独と家庭の困窮から登喜子自身の焦りも高まり、また、「何かもっと直接戦列に加わっていることを意識することによって、この重圧感をもっと自然に受け取りたいという焦燥は当時の銃後の人々には多くあった心理である。それは逃げ場もない窮迫に追いつめられた人々の最後の捨鉢な希望であった」（津留 1980 : 180-1）。このような切迫した状況が、孤立感にさいなまれる青年期の登喜子の「行きづまった感情に一つの吐け口を与え」（津留 1980 : 185）、明るさと活気をもたらしたとすれば、大変皮肉なことであったと筆者には思われる。

エリク・エリクソンの「自我同一性」という概念は、「集団同一性」というもうひとつの鍵となる概念と対を成していると考えられているが、「自我」と「集団」というありふれた対概念が、〈集団〉対〈個人〉という、近代社会についてのさまざまな議論の枠組みを提供してきたのは別に、〈個人／自我〉と〈集団〉とを「同一性」という概念で媒介したところにエリクソンの特徴があると、渡辺公三は指摘している（渡辺 2003 : 5）。

エリクソンは、「集団同一性」と「自我同一性」を、相互補完的な対を成すものとして提示し、同じ集団の成員である個人は、その集団の人間のあり方の標準的モデルを共有することで、安定した同一性を確立することができるが、標準モデルそのものが、ゆらぐとき、集団の成員は同一性の拡散という困難な状況に陥りかねないことになるとらえている、と渡辺は述べている（渡辺 2003 : 9）。

だから、勤労働員という危急存亡のときにある国家の命運との同一化によって、登喜子が、学友や家族のなかで孤立化し神経症的になっていた状態から脱し得たと、単純には言えないと筆者は考える。

「当時、一般に勤労学徒を迎えたどこの工場でもそうであったように、意気込んで出勤してきた学徒たちを巧みに活用し、その精神を指導し得るほどの組織と教育力を、登喜子たちを迎えたこの著名な大航空機工

場も持ち合わせてはいなかった。品位の低さ、仕事の単調さと洪滞、要領第一の気分などはたちまち学生に失望と倦怠を与えてしまった。ただ登喜子を救ったものは、身体の弱いことと学業の優れていることとで、事務室勤務にされた十名ほどの学友たちとの間に生まれた豊かな新鮮な友情である」（津留 1980 : 185）と津留が述べるように、単純に勤労働員に引っぱり出されたことが登喜子の神経症に治療的役割を果たしたわけではないのである。

工場という環境は教育的には好ましいところではなかったが、登喜子たちの工場も激しい空襲を受け、「血にまみれたはらわたのはみ出している負傷者」を初めて自分の目で見て、「怪我だけはしたくないと思った。直撃で一髪も残さなくてもよい、粉みじんになった方がどれだけよいかと思った。私はけがした時、自分の生命を断つナイフが必要なことを感じた。…（中略）…神様！私は決して安全をお祈りするものではありません。死んでもよい、だけど死に方だけは美しくさせて下さい！ あんなむざんな死に方はさせないで下さい！」（津留 1980 : 188-9）と日記に書くほど危険が迫っていたが、「彼女たちの友情の力は…（中略）…恐怖や絶望に沈んでゆくことを相互に防ぐ力となった」のであると津留は述べている（津留 1980 : 184）。

少女たちには、「スリルの間にもユーモア」があり、「暗鬱な待避壕の中でも、都会の女学生らしい感覚と機知とをもって戦局や文学や人生が活発に語り合わされ」、「登喜子の青年期の交友生活の最も幸福な時期は、実にこの張り切った弦のような生活気分の中に、こうした場面において展開」（津留 1980 : 184-5）し、日記にも工場での交友について多く書かれることになる。

つまり、登喜子が同一化したのは、敗れゆく国家ではなく、勤労働員で出会った彼女と同じような、優秀で機知にとみ、文学を愛する都会の女学生たち同胞を、集団同一性の標準モデルとすることによって、拡散の危機にあった自我同一性を救い出すことができたのではないかと筆者は考えている。

しかし、この死を間近に感じながらも、生き生きとした日々は、8ヶ月足らずで終わることになる。軍需工場が空襲の標的となるのは当然で、「たちまち修羅場と化し、ほとんどその機能を停止してしまった頃から、親しい学友たちも一人、二人と地方へ疎開転校し出して、再びたまらない凋落と寂寥が訪れてくる」（津留 1980 : 189）。すでに述べたが、登喜子も上の姉と父の知人を頼って愛知県の田舎に疎開することとなり、最も親しかった学友の小沢さんが、別れぎわに登喜子のサインブックに次のように書いてくれた。

もうすぐ二人もはなれてしまわなくてはならな

い事を思うと本当に悲しくなります。これもみんなみんなお国のためと思って、そして笑ってお別れしましょう。…（中略）…立川に来てからはほんとに夢のようにすぎてしまった半年余をふりかかって見るといろいろとなつかしい事のみです。阿佐ヶ谷の疎開跡に立って時間のたつのも忘れてお話しした事、工場の行きかえりに、さわがしい人間界にあって二人のみは希望にみちた、かがやかしい思いにひたって人生についてお話しした事、…（中略）…そうした中に私は、度々貴女の鋭い御観察、お考えにハッとさせられました。冷静に、真面目に人生をみつめ、深く深く考えていらっしゃるあなたを、或る時は高い高い所に尊敬の心を以て接しました。「いい人になりたい」と真剣に考えた事……あの心を一生、私達は忘れますまいね、いつ、どんな時でも、もっともっと新しき歌をうたいつつ立上って行ける人でありたいと思います。ね、一刻々々死に近づきつつある我々の、それは最上の生き方ではないかしら……。…（中略）…どんな時にも強く真剣に生きましょう。私達は日本人でありG校の生徒です。そして二人は永久に真心からのお友達です。三千年の歴史を、輝かしい歴史を考える時、日本は絶対に負けてはならないわ。我々日本人は大きな使命をになって居るのですもの、ほろびてはいけないわ。生きぬいて、そして勝ちましょう。（津留 1980 : 190-1）

津留は、当時の彼女たちの気分が出ていて涙ぐましいと述べている。銃後ではあったが、厳しい戦局を直接肌で感じながら、日本は負けてはならないと書かざるを得ない心情はもちろんだが、登喜子をこの後待ち受ける困難を考えると、筆者はなんともやるせないものを感じる。

すでに概略を述べたが、登喜子は、疎開先で転入した女学校の東京とのあまりの落差に、また農作業のつらさにも失望するが、さらに思わぬ事を知ったがために不興を買い、東京に帰されてしまう。謹厳で端正に見えた疎開先の「小父さま」が不義の子を産ませ、それを知った登喜子は、「おまえは慢心している、他人を馬鹿に見ている」と論されたのである。

きちんとした外の家で生活しただけでなく、人間の裏表も知って戻ってきた彼女は、「わが家の欠点」を、「父の老耄」を一層批判的に見えるようになってしまったようである。しかも、敗戦間際の「東京はもはやすべてにわたってあまりにも急迫し荒廃し」、「この大きな圧力の前には暗い失望に終わってしまう。若い夢や憧れを持つべき年頃なのに、敗戦直前の客観的情勢は

あらゆる面にまさにまったく絶望的であった」と津留は述べている（津留 1980 : 198-9）。

まもなく無条件降伏の日が訪れる。登喜子は日記に、「出来るなら阿南陸軍大臣のように自刃すべきだ」（津留 1980 : 201）と記す。聖戦と教えられ、一億玉砕と叱咤された少女には、敗戦は自分の身の心配や不安よりも、自責の念が強かったのだらうと津留は推察している。とはいえ、津留は、この日の日記のこれ以上の引用をしていない。われわれには、登紀子がどのようなことを書き、どうして津留がそのように受け取ったのか正確にはわからない。旧版の出版が昭和25年であることを考えると、あえて詳細を伏せたとも考えられなくはない。

「しかし、社会は案外混乱もなく、学校も数日後には始まるけれど、それは来る日も来る日も真夏の炎天下に空腹を抱えて、惨めに焼け落ちた校舎の跡片付け作業であった。思い出の種に満ちたわが家や母校の変わり果てた焼跡を整理する惨めな気持ち！ 動員中の親しい友も疎開先からまだ帰らず、虚脱したような教師たちには生徒を励ます力もなかった」と、津留はなまなましく述懐している（津留 1980 : 201）。

登喜子にとって、こうした生活の惨めな暗さは、彼女の人生嫌悪を急激に深めたのだが、津留は、彼女の主観においては、愛情の欠乏感として感じられ、自分が愛されないパーソナリティゆえにこうなったと考え、自己嫌悪とも結びついてしまったとしている（津留 1980 : 201）。そしてある日、家族が全員で登喜子を批判しているのに出会ってしまう。

9月1日 学校もG校の冷たい空気そのままのように味気ない。帰ったら一家揃って私の研究会なるものをやってらっしゃった。腹が立った。お姉さまの取澄ました顔を一つ撲りつけてやりたかった。…（中略）…私はたしかに間違っていた。どんなことがいけないということかよく知らなかった。人の家に行ったらぜったい自分の思う通りにしてはいけないということを知らなかつた。私はどうしてこういう暗い性格に生まれついたのであろう。今までよい子になろうなろうとつとめたことがあまりにも今日は馬鹿らしいことだったように思える。私はいくら努力したってよい子にはなれないのだ。人もみんな好きになかなれないし好かれることだってできはしないのだ。私の生れ附きがそうなんだもの……。…（中略）…私は生まれつき呪われているのだ。…（中略）…よい子になるなんて凡そくだらないことだ。…（中略）…自ら私の人生を破壊してやろう。それが私の性質に対する復讐であり私をこのよ

うに生んだ神への復讐である。私は明日から幽霊のように生きよう。不必要なことはぜったいに口を閉じよう。自分ひとりの殻に閉じこもろう。私はそうやってめちゃくちゃな人生を送るのだ。萬歳！（津留 1980 : 202-3）

日記の中の登喜子の自己像と、疎開していく別れぎわに、小沢さんがサインブックに書きつけた、あのときふたりの間に確かに存在していた登喜子の像とが、あまりにも異なることに筆者は愕然とする。家族や学校の外部に出て、自分と同じような心性の少女たちと、命の危険にさらされながらも澁刺と過ごしながら、青年期の独立的な自我が確立しようとしていたのにもかかわらず、家族が、それをあっさりと崩してしまった。家族や級友から承認を得ようと、一生懸命「よい子」になろうと努力してきたが、結局意味のないことだと悟ったのだ。敗戦のその日まで、どんなに苦しくても、理不尽でも、正しいとされてきた生き方、価値観に合わせようと努力してきたことは、結局無駄だったのである。ならば、こんどは自分の人生を破壊してやろう。それが、無意味な努力を強いておきながら、突然手のひらを返した者たちへの復讐となるというのである。

この日から十日目に登喜子は自殺を決意し、睡眠剤を求めて、東京のあちこちを訪ねて歩き、15日について入手する。

9月30日 とうとう機会は来た。しかし死ぬるかどうかまだ分からない。死ぬなければ又そのときだと思う。白い物をつづつ口に入れるとき私は少しも躊躇を感じなかった。むしろ掌一杯にあって中々減らない白い物を見て、これだけ片付けなきゃならないかとうんざりした。済んでしまったらほっとしてあとのことなんかどうでもいいという感じがした。書置もしない。自然に死ぬことにした。第一、死ぬかどうかさえ分りゃしないんだもの。あとのことはみんな何でもかしてくれるだろう。…（中略）…さようなら、この世よ、私は実に思い切りよくこの世を捨ててしまうことになったものだ。さようなら、お母さま、さようなら、皆さん、ゆりちゃんにも、小沢さんにも吉木さんにもポンにもトンにもさようなら。私はこれで自由だ。すべては終わりだ。これで楽になった。すっかりおしまいだ。ならいいんだけど。（津留 1980 : 207-8）

就寝の前に睡眠剤百錠をすべて服用し、「例の如く冷静にこの日記を書き終えて床に入った。しかしこの自殺は失敗し、彼女は丸一日の昏睡の後意識を回復し、

一週間後にはまったく正常に復して、再び日記にペンを執っている」（津留 1980 : 208）。

10月7日 死んでしまうつもりだったのに私は生き返ってしまった。…（中略）…きけば私はまる一日の間、眠っていたのだそうだ。それなのに生き返って来た私の心は少しも変わらずいる。不思議な気さえする。子供にかえったようにお母さまの手からお蜜柑を食べさせて頂く。甘い幸福感が湧いた。私は死ねなかった。とすれば生きていかなくはならないのだろうか。これから先何年、何十年も生活すべく余儀なくされることを考えると面倒でおくくうで仕方がない。ああ、死ねて居たらどんなに楽だったろうに。私は又いつか死を図りそうな気がする。（津留 1980 : 208-9）

津留は「結局この自殺は、その面^{つら}あての意識が示すように愛の要求の最後の表現であったとみれば、それは現世と最後まで繋りをもっていた——生き返るかも知れないという意識があったのも当然である。彼女はやはり生きて愛されたかったのである」（津留 1980 : 214）と述べているが、たまたま質の悪い睡眠剤が失敗させたのであって、死ぬるものなら、死んでしまえ、という気持ちはあったのではないか。「死ねなかった」、「考えると面倒でおくくうで仕方がない。ああ、死ねて居たらどんなに楽だったろうに。私は又いつか死を図りそうな気がする」と書いているのも、そう嘘ではないのかもしれない。登喜子は実行を躊躇することはなかった。偶然にも未遂に終わったのであって、詰めが甘く本気ではなかったと考えるのは疑問を感じる。

紀田によれば、戦中の庶民日記が申しあわせたように悲愴味を帯びてくるのは、空襲がよいよ激しさを増す昭和19年12月あたりから20年1月にかけて、敗戦が濃厚になってからであり、当時東京医大の苦学生であった山田風太郎が8月15日に大衆食堂で玉音放送を聞き、「頬が白み、唇から血がひいて、顔がチアノーゼ症状を呈したのが自分でもわかった」と記した一節を紀田は紹介している（紀田 1995 : 209-11）。しかし、紀田は、いくつかの立場から玉音放送を聴いた者、聴かなかった者の日記の一節を紹介した後で、山田が、自分は「ドラマの通行人どころか傍観者」でしかなかったと回想したことを紹介し、彼がこのように考えたのは、小学校時代の同窓生34人中、14人が戦死したにもかかわらず、「生きのこったということじだいへの内心忸怩たる思いは、当時の若者（戦中派）のほとんどすべてに共通する思い」（紀田 1995 : 216）

からであろうと述べている。「傍観者が本質的に戦争責任を負う存在でないとすれば、戦争指導者に対して『この（注 自殺未遂を起こした東条の）死に対する踏み切りの悪さだけはどうにもいただきかねる』（『戦中派不戦日記』二十年九月十九日）というような手きびしい批判は行っても、自責の念は生じないのが当然であろうと」紀田は述べ、昭和20年8月15日から29年2月までに敗戦が理由で自決した日本人は約600名に及ぶが、大部分は軍人・官吏とその家族などであったとして、紀田は一般の民間人には、国家に心中立てする理由なかったとしつつも、例外として、責任を取って自裁しようとした作家の海野十三を挙げている。海野は作家仲間から説得されても、遺書を書き、夫人や子どもとともに死のうとし、主治医に青酸加里をもらいに行くが手に入らず（紀田1995:226）、数日間の逡巡の末、「夜半、忽然として醒め、子供をいかにして育てんとするかの方途を得たり」などと記し、突如として死ぬことをやめ、現実の問題に眼を醒ますのである（紀田1995:227）。登喜子の自殺の理由には、津留がいうように多分に個人的なものであったにせよ、睡眠剤を求めて焼け野原の東京を彷徨い、ついに実行にまで導いたのは、このときの国民の集団心理からの後押しがあったと考えても、こじつけにはならないのではないかと筆者は考える。

それはともかく、蘇生後まもなくは内的な意識的変化は起きていなかったものの、外的な環境の方に変化があったと津留は述べている。学校において進学指導が始まり、勉学が登喜子の眠っていた向学心と呼び覚まし、前向きな意欲が生まれ、また親しい友人も疎開先から戻り、次々と復学し、学校が活気あるものに変わっていったのである（津留1980:215）。

学校には「新しい勉学気分の勃興」があり、「敗戦後、知的空白を埋めんとする強い欲求が、まじめな若い人々の間にみなぎり起こった。教師たちも不慣れた作業や工場の監督から本来の教壇に帰れた喜びをもって、かつは学生たちのこの欲求に同情し、彼らを知的に鍛えることによって、敗戦に対する教師としての学生たちへの自責の苦しみからいくぶんなりとも逃れようとした。これが敗戦後しばらくの間、優秀な学校であらゆる困難な条件にもかかわらず気魄ある勉学がなされた心理的理由であった」（津留1980:217）。登喜子の学校も進学希望者が多く、進学準備の指導が熱をもって始められ、しばらくぶりに登校した彼女にも、学級の雰囲気が一変し、かつての逃避気分が一掃されていることを感じ取り、向学心に火をつけたと津留は述べている（津留1980:217-8）。

10月13日 …力一杯しようと武者ぶるいが湧

く。いよいよ力を出すときが来た。うれしい。一日、一日が元気と緊張のうちに過ぎてゆく。…（中略）…出来るだけ勉強しよう。全力を出そう。ああ勉強できることは何てしあわせなんだろう。勉強で頭がいっぱいになって何もかも忘れられたらよいだろう。（津留1980:218）

津留は、青年には全力を投入できるような仕事が、生活に統一と目標を与えることができると述べ、「戦時中、日本にはそれが国家の要請として限りなくあるように思われながら、何か個人の目標とは遊離していた。個人生活は案外空虚だった。そこにかえって逃避的な張りのない生活が生まれ、諸種の悩みや暗い生活気分を生じる余地を残していた。少なくとも女学生たち、特に登喜子の生活に対してはそういうことが言えると思う。しかし今や登喜子には学生としてのその本来の目標が個人生活に直結して与えられた」（津留1980:220）と述べている。戦時中の集団同一性は虚構に終わった。そのことが、直後の虚脱状態を引き起こしたが、いまや青年が自己の存在証明のために、エネルギーを投入すべき新たな対象を見つけつつあったのだ。

津留が日記資料などから再構成した登喜子のサイコヒストリーは、そろそろ締めくくりとなるのだが、残念なことに、残すところあとは入試準備に無心に専念すれば良いというわけにはいかなかったのである。登喜子の父は退役海軍大佐として軍のコネで軍需会社の顧問などをしてきたが、軍が崩壊したため、一家の生計が立ち行かなくなってしまった。この危機に際して、母を中心にずっと不仲だったに姉妹たちとも、はじめて結束しなければ生きていけないことを受け入れ、上の姉は女子専門学校を中退し、東京の家は人に貸し、母の郷里に引っ越すことになる。昭和20年12月に一家は東京を去り、登喜子はこのままG校を卒業したかったという思いはあったものの、3学期から移り住んだ県で最優秀の高女に転入学し、地方の女学生に笑われまいと、また希望どおり進学して、なじめない転入生生活をすみやかに終わらせようと熱心に勉強し、女子の最高官学府の一つに数えられる某官立女子専門学校に合格。苦学を条件に家族から入学を許される。母は再び地方の女学校の教員となり上の姉は家事、下の姉は勤めに出て、弟は新制中学校に入学することになった（津留1980:227）。

2月23日 私の日記はこの頃くだらなくなつた。紙が無駄だと思ふ。それにしても私は一年前のように友だちのことばかり書いたり、人をあれこれ批評したり、むやみな感傷におちいったりす

る、ああした日記は書きたくないと思う。今から思えばあの頃は若かった。あの頃がなつかしい。あの頃の少女らしい感傷的な気分がしたわしい。(津留 1980 : 226)

かくて、登喜子の少女時代、すなわち、交友関係の悩みや家族との葛藤を、日々日記に書かずにはいられなかった時期は終わりを迎えたのである。

8 結びにかえて

津留は、昭和 30 年に出版した『女子青年心理学』のなかでつぎのように述べている。

青年の生活を知るために、教師に見せるための日記を書かせることは、如上の青年日記の特性を知らない、教育的には極めて野暮な方法であり、青年を冒瀆するものですらある。… (中略) …徒に彼等に生活の二重表現を強いるか、激しい反抗心をあおる結果となるだろう。教師が青年の真の内面生活を知りたいなら、まず何よりも彼等の信頼を克ち得ることである。信頼する成人には、青年の方から自己の内界への理解を求めに来るであろう。(津留 1955 : 72)

シュブランガーが、人間の一生の中で、「青年期ほど、人が理解されたいという強い要求をもつ時期はない」(Spraner 1924=1973 : 5)、「青年ほど深い孤独のうちに触れ合いと理解とを渴望している人間はいない」(Spranger 1924=1973 : 47) と述べたように、確かに津留の言うとおりにかもしれない。青年は自己の内面世界を理解してくれる信頼できる他者を心から求めている。そうであるからこそ、青年期にある若者といえるのだろうけれど、理解してくれることを期待して他者とふれあうことによって、そしてディディエのいうように、自分以外の自我とふれあうことによって、自らの自我を確かなものにする機会を得るのであろう(Didier 1976=1987 : 170-1)。

津留は、多くの女子学生たちの手記を資料として、昭和 30 年のこの本を書いているので、すでに登喜子の事例だけに限ったことではないのかもしれないが、彼女が日記を中心に多くの資料を提供し、津留に全面的に協力したことから、筆者からすると、上のような実感と自信に満ちた言葉が出てきているように読めてしまう。

しかし、山下恒男は、「青年心理学は青年に対する愛情の科学である」⁽³⁾としたある青年心理学のテキストの著者の一人であった津留が、1968～76年の大学

闘争にショックを受け、「好意的な学生観をこわされた人が多いように見える」と述べているくだりに対して、津留には「自分の胸の中につくりあげていた『青年像』が見事に打ちこわされたくやしさを読み取ることはできて、… (中略) …『好意的な学生観』の本質に対する根本的な問い直しの姿勢は見られない」と指摘し、さらに津留が「現代の青少年に見られる乱雑で珍妙で分裂した諸行動を、すべて新しい創造的価値を含んだ未来的なものなどと説く甘さを脱して、もっと学者らしい客観性をもって彼らを研究してゆくことこそ、今後の青年心理学の課題であろう」と締めくくっていることについて、居直り的で、愛情の科学であるはずの青年心理学の破綻だと批判している(山下 1977 : 98-9)。

津留のこの『女子青年心理学』の「序にかえて」のなかで、依田新は、「じつは私にもちよつとひつかかるところがあるのです。… (中略) …読みながら私は多少の抵抗を感じ、がらにもなく青年のがわにたつて抗議したい衝動にかられたところもあります。… (中略) …この本が青年に対して同情的な立場で書かれていると申しましたが、概してそうなのですが、時々津留君の中のおとなが出てくるのでしょうか。私は現代の青年たちが、この津留君の中のおとな、そしてそれは今日の社会が持つている青年観を代表するものであるが、それにどのように抗議するか聞きたいと思います」(津留 1955 : 3) と忌憚のない感想を寄せている。

青年心理学は、依田が述べるように、多分に青年に「同情的」であり、青年を理解したいという気持ちに満ちていることは否定できない。しかし、山下恒男(山下 1977) や北村三子(北村 1998) が指摘するように、青年の反乱に対する防波堤としての役割を期待され、予防的、かつ統制的な対応が取れるようになるための研究であり理解なのである。その二律背反するところを、どのように引き受けてゆくべきか、長年の解決されない課題であるだろう。

津留による登紀子の日記分析においても、心理学者として、<客観的かつ科学的>まなざしをもって、「女性」らしい肉体に成長する過程で、健やかならざる発育が、パーソナリティの形成にいかなる影響を及ぼし得たのかにまで迫り、躊躇うこともなく初潮の時期や 20 歳時の体形にまで論及しながらも(筆者も生物学的な発育状況が無視しえないという理由を理解しないわけではないが)、日記という脆弱な資料から一人の少女の成長を再構成するうちに生じていった「深い人間的な愛着」(津留 1980 : 229) を認めつつ、学術的研究としては、パーソナリティの形成上の問題性を挙げ、心の歪みを指摘し、そこにこだわらざるを得ないところに、前述した二律背反と同質のものが見えてし

まうのである。登紀子自身は、日記という心理装置によって、煩悶し、苦悩を増幅させてもいるが、自我を育て、やがてその内閉的な世界を必要としなくなる成長を示しているのにも関わらず、心理学のまなざしが、あくまでも日記という心理的資料のうちに、いびつな心の病跡をたどることに、あくまでもこだわる姿勢に、筆者は異和感をぬぐいきれないのである。

*引用文の漢字は原文そのままとし、仮名遣いは現行のものに変えている。

[注]

- (1) 津留は『女子青年心理学』の「はしがき」において、「従来の日本の青年心理学は、多く男子青年を主にして」、「女子青年の本質的特徴そのもの」を「直接的考究」するものがなかったため、自分はこの書で〈女子青年〉の特性を描き出そうとしたものの、「この書も、ただ従来の男子を主にした青年心理学の立場から女性を見直し吟味して、そこに何等かの女性的特徴を見出そうと試みたものに過ぎ」なかったかもしれないと、その限界を自ら述べている（津留 1955：5-6）。ジェンダー論的問題視角のない時代ゆえの限界として、アプリアリに近代の青年期なるものが、男女どちらにも存在するかのよう前提になっているのだが、今日の青年（期）の歴史研究から、自己実現の過程で国家的理想を内面化し、現実の自己との乖離に煩悶苦悩するのは、特権的な男子青年だけであったと考えられている。ひとまず本論文でも「青年（期の女子）」としたが、はたして女子青年というものがあるのか、という問題は避けられない。今回の小論では取り上げることができないが、〈近代の青年〉は、男子に限ったものであったと考えるが、発達段階における〈青年期〉をジェンダー化して置き換える適当なものが思いあたらないという困難がある。こうした問題を無視することはできないものの、津留が多くの「女学生諸姉」から提供を受けた率直な資料に基づいて書かれた『女子青年心理学』をジェンダー論的に読み直す意味があると筆者は考えている。
- (2) 津留宏の少女日記研究の再検討を勧めたのは、法政大学社会学部を退職された指導教授の横山浩司先生であり、旧版、改訂新版および少女日記の研究の助けとなる資料を数点お貸しくださった。
- (3) 旧版の推薦文を書いた重松は、「津留さんは青年を愛することが深い。それ故に、この貴重な資

料の提供を受けることができたのである」と述べているのは、裏付け的にも読めて興味深い。

[文献]

- Bühler, Charlotte Malachowski, 1921, *Das Seelenleben des Jugendlichen. Versuch einer Analyse und Theorie der psychischen Pubertät*. Jena: G. Fischer. (原田茂訳, 1969, 『青年の精神生活』協同出版.)
- Didier, Béatrice, 1976 *Le journal intime*, Presses Universitaires de France. (西川長夫・後平隆共訳, 1987, 『日記論』松籟社.)
- Frank, Anne, 1952, *THE DIARY OF A YOUNG GIRL*, Doubleday & Co. Inc., New York. (深町眞理子訳, 1986, 『アンネの日記』文藝春秋.)
- 本田和子, 1990, 『女学生の系譜 彩色される明治』青土社.
- 伊藤祐時・松村康平・大村政男編, 1977, 『心理技術事典』朝倉書店.
- 紀田順一郎, 1995, 『日記の虚実』筑摩書房.
- 北村三子, 1998, 『青年と近代』世織書房.
- Spranger, Eduard, 1924, *Psychologie des Jugendalters*, Quelle & Meyer. (原田茂訳, 1973, 『青年の心理』協同出版.)
- 津留宏, 1950, 『一少女の成長を見る 教育心理学的考察』秀英社.
- , 1955, 『女子青年心理学』明治図書.
- , 1980, 『一少女の成長 小さな魂の記録の分析』ナツメ社.
- 山下恒男, 1977, 『反発達論 ——抑圧の人間学からの解放』現代書館.
- 渡辺公三, 2003, 『司法的同一性の誕生 市民社会における個体識別と登録』言叢社.